

〔書評と紹介〕

久保継成著 『法華経菩薩思想の基礎』

久留宮圓秀

本書は著者が昭和五十九年五月に学位請求論文として立正大学に提出した『法華経菩薩思想の基礎』にさらに幾つかの論文を追加し、加筆修正がなされたものであると言う。

本書の構成は大きくは三つの部分から成っている。即ち、序論「衆生を救済者とする経典」、第一篇「序品の研究——『法華経』の位置を示す章」、第二篇「法華経菩薩思想の基礎」である。

著者は序論で自己の法華経研究の視点を三つ提示している。①『法華経』全体を一つのまとまった経典として見、これを研究対照とする姿勢が必要。とは言え、②成立史的視点を無視することは出来ない。③『法華経』特有の説得の手法を念頭に置いた検討がなされるべきである、と言う。そして注記(pp. 8-21)には近代に於ける法華経研究の書誌が挙げられ、また、法華経の成立過程・成立年代に言及した諸学者の見解を詳細に紹介している。この注記から、法華経の成立過程については、最近まで多大の影響を与えてきた布施浩岳博士の説をはじめとする諸品の段階的成立論と、それに対する批判反省の諸品同時成立論があることが判明する。著者は両論における諸説をこの注記の中で批評判定することは避けているが、②の視点を重視している点では同時成立論に組しているのかもしれない。しかしながら、「仏塔信仰と経巻供養の問題等について諸品間で記述態度に相違が認められる。したがって荻谷博士の所論の前提であると思われる、『法華経』としてのまとまりが成ったことがすなわち『法華経』の成立を意味するという立場には同意するが、

言うところの諸品が同時に成立したとの結論には俄かには承認しがたい」とする(p. 64)。

布施博士、塚本啓祥教授などの段階的成立論者は「不須復安舍利」(大正9. 31b28; Kern 231. 9-10)を舍利安置の否定、「不須爲我復起塔寺……供養衆僧」(大正9. 4b25; Kern 338. 5-7)「不須復起塔寺」(大正9. 4c. 13; Kern 339. 8-9)をスツーパー建立の禁止と理解するが(pp. 301-302)、梵文テキストや妙法華をありのままに読めば、当然、平川彰博士、荻谷定彦教授の反論となつてあらわれよう(pp. 132-133, 302-305)。著者は荻谷教授が「法華経に於いては、caitya という語は stupa (塔) と同一の意味であり、普通に『佛塔』を表わす言葉」というのに疑問を提出し(p. 303)、「私見を述べるとすれば、『法華経』の caitya は経自身が説く通り、構造的には stupa と変わりなく、仏塔信仰の流れの中で言われていると考えるべきであろう」(p. 303)とし、法師品と分別功德品を引用して caitya の stupa への言換えを説明する(pp. 292-297)。そして caitya は stupa と言ひ換え得る「構造物」を指す(p. 297)と指摘する。

序論、第二章で sandhabhāṣya への言及がある。著者は sandhabhāṣya を羅什が「随宜所説」「随宜説法」と訳したとし(pp. 30, 36)、諸の如来・応供・正遍知たちの「意図を含めた言葉」としている(p. 25)。しかし、sandhabhāṣya は羅什訳では「随宜所説意趣」までが当たると筆者には思われる。もっとも、著者は「sandhabhāṣya は様々な説となる、その際の仏の sandha (意図) は衆生にとって難解である」と説明する(p. 26)。また、注記において(pp. 30-44)『法華経』における sandhabhāṣya の語義に関する諸説を詳細に紹介している。

第一篇は「序品の研究」である。著者はとりわけ序品を重要視している。すなわち、「今日まで『序品』は『法華経』研究の上で、あまり検討の対象とはされてきていないのである。あるいは「序品」が成立史の立場から見

『法華經』の古層が成立した時期より新しい成立であるとする見解に影響されてのことかもしれない。しかし今日に伝わる『法華經』を『法華經』として受け取る姿勢を、忘れてはなるまい。」といい、そして『法華經』は、それとして完成された一つの經典なのである」という(p. 60: p. 61②)。序品は方便品以降の展開を暗示していると同時に、それ相応の經の意図があると見て(p. 61)、序品の記述と各品の内容に詳細な検討を加えていく。

第一篇では比丘・菩薩が問題にされ検討が加えられるが、第二篇では中心課題が「法師」へと移っていく。方便品・譬喩品・信解品での「仏の子」が、法師品を境として、法師 dhammahānaka となっていく經の展開を詳細に記述する。著者は、法華經の物語の中に、比丘・菩薩↓仏の子↓法師という流れを見だし、それを經典成立史の段階的成立論の根拠となる断層と受け取ることに重点を置くことをせずに、法華經の構成上必要な手法ととるのであろう。このことは法華經の塔観についても同じであらう。

著者は、議論を進めるにあたって、法華經の梵漢テキストを縦横に引用し(蔵訳の該当箇所を示し)、現代語訳をつけているのは読者の理解を大いに助ける。現代語訳の中で一箇所のみ気にかかる点を指摘しておこう。二三九頁、

bahu-deva-nāga-yaksa-gandharvāsura-garuda-kinmara-mahoraga-
manuṣyāmanuṣyān bhikṣu-bhikṣunī-upāsakopāsikāḥ śrāvaka-
yānyān pratyekabuddha-yānyān bodhisattva-yānyāṇṣ ca
(KN 224. 2)

(無量語天、龍王、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人與非人、及比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、求聲聞者、求辟支佛者、
求佛道者。大九、三〇下。P. 96b7, N. 224. 2)

の現代語訳は「多くの神、ヤクシヤ、ガンダルバ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、人間、人間以外のものたち、また、声聞乘、辟支佛乘、菩薩乘の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷たちを、」となっている。「……菩薩乘の比丘、……」の箇所は従来の翻訳とは相違する訳であり、漢訳もそのようにはなっていない。蔵訳は漢訳「求辟支佛者」に相当する訳語を欠いているが、漢訳と同じである。同様の現代語訳が二五四頁にも出るので、これは誤訳ではなく、著者の意図的訳出であらう。しかしながら、この著者の独自の訳出についての説明は示されていないようである。本書に誤植は極めて希で、読者がそれを容易に正しく判定し誤解を招くようなことはない程度で、無きに等しい。

平川彰教授が「序」の中で指摘する如く「本書は、『法華經菩薩思想の基礎』と題されているように、『法華經』の示している菩薩思想の根本理念」に言及を試みたところに学問的貢献があることは勿論であるが、加えて、本書が注記において示す従来の斯の分野に関連する学者の諸説への言及は、取分け便利であり、研究者を裨益し、有意義である。

東京・春秋社、昭和六二年(一九八七年)二月九日。(序五頁、自序・凡例・目次一五頁)三二五頁、索引七頁、英文要旨四五頁。七〇〇頁